

会議の概要（議事録）

会 議 の 名 称	(番号) 1-49	墨田区基本構想審議会 第1部会（第1回）		
開 催 日 時	令和6年7月25日（木） 19：00から21：00まで			
開 催 場 所	すみだリバーサイドホール イベントホール			
出 席 者 数	【委員】加藤久和（部会長）、相澤純一、阿部貴明、老田勝、井上佳洋、佐久間之、島田泰子、森山育子（計8名） 【事務局】楠政策担当課長、政策担当主査（原）			
会 議 の 公 開 （ 傍 聴 ）	公開(傍聴できる) 部分公開(部分傍聴できる) 非公開(傍聴できない)	傍聴者数	4人	
議 題	1. 事務局からの伝達事項について 2. 第2回墨田区基本構想審議会の振り返りについて 3. 各部会自由審議			
配 付 資 料	1. 次第 2. 墨田区基本構想審議会委員名簿【資料1】 3. 第2回審議会の振り返り等【資料2】 4. 委員アンケート（区の好きなところ）【資料3】 5. 委員アンケート（区の改善すべきところ）【資料4】 6. 委員アンケート（大切にすべき理念「まち」）【資料5】 7. 委員アンケート（大切にすべき理念「ひと」）【資料6】 8. 区民ワークショップで寄せられた意見【資料7】 9. こどもから寄せられた意見【資料8】 10. 今後の部会スケジュール（事務局案）【資料9】			
会 議 概 要	第1部会、第2部会、第3部会ともに同日、同会場で実施。 はじめに、全体共有事項について、事務局から説明した。 1 事務局からの伝達事項について 事務局から資料9について説明した。 2 第2回墨田区基本構想審議会の振り返りについて 事務局から資料2から8までについて説明した。 以下、質疑応答			

(第2部会 山口委員)

墨田区に居住している外国人はすでに5%ぐらいの比率でいると思うが、そうすると比率的に考えると、手帳を所持している障害者の方よりは多いと思う。

外国人が部会の中のテーマとして設定されていないが、各部会で包括的に議論される内容ということでよい。

(事務局)

おっしゃるとおり、外国人の数が増えていることは先程データで示した通りである。視点は様々あると思っていて、外国人を地域コミュニティやまちづくりの中で包括的に受け入れていくべきではないかというような意見や、医療を受けるにあたっての対応、地域の教育における環境をどう整えるか、また産業における働き手という視点であったり、インバウンドを見越した場合の観光の視点であったりというところもある。

外国人という括りで第1部会、第2部会、第3部会どこに置くというところがなかなか難しかったので、あえてこの部会の中の区分分けとしては設けていない。この点データとしてお示しをさせていただいたので、それを踏まえて各部会の中で、ご議論いただいていいと考えている。

(山口委員)

承知した。

3 各部会自由審議

全体共有終了後、各部会に分かれて審議を行った。

以下、各委員の発言の要旨

(加藤委員)

今日は先程お話があったように、まず皆様からいろんなご意見をいただくということが主と思っている。是非忌憚のないお話をいただきたい。

議論のやり方については、私が最初に申し上げ、その後委員から1人ずつご自由にご発言をいただきたいと考えている。

先程事務局からお話があった中で、墨田区は、ブラックホール自治体として位置づけられている。その地域の中で出生率は低いけれども、地域外からたくさんの人が入ってくることによって、自分のところでは自然増が少ないのに外から人を持ってきているというような意味合いで、ブラックホール自治体という名前がつけられている。

定義も曖昧ではと個人的に思っているが、それを、先程事務局から紹介された上智大学の中里准教授が言うには、出生率を計算するときに、女性の数に対してどれだけ子供が生まれたかという計算をするが、結婚している女性がどの程度子どもを産んでいるかを表す有配偶出生率の指標で見ると、東京都、墨田区は結構高い比率が出ている。つまり、子供を育てやすく、決して育ちにくいところではないのではという議論で、合計特殊出生率が低いのは未婚の方がたくさんいることが原因であって、決してそれが子育てにとって不利な状況ではないというのが中里さんのご意見。その有配偶出生率等々を見ると、墨田区は結構高いので、そんなに心配することはないのかなと思う。ただ、たくさんの方が流入してきて人口を維持しているところ、特に外国人の方も増えてきているところをどう考えるべきかというこ

とは、考えていかなければいけない点と思っている。

また、個人的な墨田区のイメージというのは、スカイツリーもそうだし、点として有名なところはたくさんあるが、全体の面とすると、意外と他の区と良い意味でも悪い意味でも何となく少し埋没しているようなイメージがあると思う。それはそれだけ色々なものを持っているんだろうなというイメージがあるから、墨田区全体としてブランディングというか、何かイメージを高めていくということも一つの考え方かと思っている。

事務局からも様々なデータをいただいたが、一番知りたいのは何で墨田区が選ばれてきたのか、何で墨田区から人が出ていくかもよくわからない。もちろん若い世代だと自分の住宅を持つために外に出ていくこともあるとは思いますが、何で墨田区に來られたのか、何が不満で出てくのかといったところが分かると良いというふうに思う。

一点だけ申し上げると資料のデータにもあったが、墨田区に住まれて 10 年以内の方が結構増えてきているので、そういった方々と、昔から住んでいる方のイメージのギャップみたいなものを調査していくことも必要かと思う。

（阿部委員）

先程の事務局のお話の中で、職住一体が 80%から 30%まで下がってきているとのことだった。これはどういう意味なのか。私は墨田区の北東、立花にいて、卒業したのは東吾嬬小学校だが、小学校の時の同級生は、私の記憶では少なくとも 3 分の 1 はある会社の寮に住んでいた。その会社が区から撤退されて、工場がなくなった瞬間に 3 クラスだったのが 2 クラスになった。何が申し上げたいかというと、これから先、いわゆる大型の産業誘致みたいなことは、あまり望めないし、望まないだろう、という風に思う。一方で、特定の産業があってその周りに支える人たちがいるようなその産業集積が一定程度あって、分業されているエリアもあるが、恐らく技術もどんどん進む中で昔のような分業は無くなっていくと思う。例えば印刷業で、その産業の集積の中で分業していくというのは、無くなってきつつある。そうすると、ものづくりのまちをちゃんと維持するということも、どんなことが必要なのかというのは、今後の課題だと思う。

もう一つは、明らかに環境が変わったので、どんどん住みやすくなっている。私の年代前後ぐらいだと、子どものときにいわゆる公害ピークのときで、毎日光化学スモックが出て退避しなくてはならない状態で、喘息の子がたくさんいて、墨田区の小学校に通っているが、実際に暮らすのは区外の環境の良い所に住んでいるという友達がたくさんいた。親が区内で仕事をしているが、ここに住むことは子どもたちのために良くないという判断で、区外へ出ちゃった人もたくさんいると思う。本当は、職住近いことが理想だけれども、非常に住みにくかった。これが大きく改善されたので、スタートアップの皆さんも含めて、住むところと仕事をするところが、区内でうまくできると良いと思う。防災対策についても、すごく職住一体のメリットが大きいので、そういう意味で一定の規模の従業員をお持ちの会社は、役所も含めて、できるだけその近くに住んでもらえるようなインセンティブをつけるとだいぶ違うかなという気がする。

(老田委員)

今阿部委員が言った職住一体のインセンティブの話は、実は今私の会社で実践をしていて、大体 8%ぐらいの従業員が区内に住んでいる。私の会社は区の南側にあって、元々相当工場が多かった地域だが、大体私が小学校ぐらいの頃から、次々と工場が千葉県の浦安や八千代の方に出ていって、同級生も引っ越してしまうし、それが退いた跡には何ができるかという、ほとんどの場合はマンション。自分が小学校の頃は小学校とか幼稚園以外、周りを見渡しても、2 階建ての家は無く、平屋で今と同じぐらいの人口があって、日本一の人口密度の街みたいな、そんな話が墨田区あたりの状況だったと思う。実際それがどんどん進んでいって、今はもう縦に人の密度が高くなっていて、同じ人口だけど、実は人々の間の距離っていうのは非常に離れてしまって、エリアの中で顔が見えるっていう状況じゃなくなっているような気がする。

先程も皆さんが言っていたようにそのエリアで分業みたいな話、実は綺麗なサプライチェーンが、街の中でできていて、そのサプライチェーンのメリットがあるのでそこに集合していたみたいなことが実際はかなりあったと思う。ただ、今はそういう形ではなくて、製造拠点はどんどん郊外化していて、外側で繋ぐので、都心部に以外と物が入ってきていない状態。だから都心部で渋滞は起きない状況に今なっている。今更都心部に、そういうものが及ぶということは無いと思うので、その中でものづくりのまちというならば、どういうあり方をしていかなければいけないのか、というのはちょっと考え直さないといけないと思う。

地下鉄が入ってきたことで、相当便利になっていて、都心部で働かれている人たちがベッドタウンとして両国を選択して、単身のワンルームマンションにたくさん住んでいる。特に両国あたりはそのような状況になっている。なので、その人たちは、仕事場は六本木や渋谷、新宿などに所属されているけど、あまり自分の住んでいるところには興味がない。例えば町会とかにはなかなか参加いただけないので、町会の活動を支えているのはほとんど高齢者になっていて、盆踊りもできなくなってしまったりしている。

実際に宅地化の話は、恐らく今の不動産の事情からするともう止められないと思うので、その中で他の産業とどうバランスを取っていくか。ただ、住んでいるだけの人っていうのは強烈な影響力を持っていて、1 人がクレームを言うだけでイベントが中止になったりする。皆が意見を言ってこのイベントをやろうと思っても、1 人の NG でイベントが止まるということも、かなりいろんなところで起きているので、この中でどう作っていくのかはかなり技がいると思う。

例えば、住宅の遮音性能を上げる側に政策を持っていって、イベントができるように変えていく。その遮音性能向上のために、区としてお金を出すみたいに轉換していかないと、辞める話ばかりになってしまうと思う。どちらかというとまちづくり寄りの話にもなるが、私の今の実感である。

(井上委員)

今どんどん商店街は減っているというのは皆さんもご存知の通りで、墨田区で多分一番商店街があった時期で 56 ぐらい商店街があったらしい。今は 35。墨田区は、残念ながら面積が狭いというのもあるので、一概に単純な比較はできないが、多分

23 区で一番商店街が少ない地域になってしまっている。

そもそも商店街とは戦後の闇市からできてきて、それが色々なとこにできてきた。大体私も商店街連合会という組織はどこの区も 70 年前ぐらいにできた組織で、72 年目になる。

今回のこの基本構想の策定の中で、商業支援はどういうふうにやっていけばいいのかということは結構思っている。

今までは商店街というキーワードが行政的にも使いやすかったということもあったので、商店街の支援とか商店街を復活させるというのが多かったが、今申し上げた通りどんどん減ってきている。また昔は先程の阿部委員、老田委員のお話の通り、工場があって、そこに住む人がいて、それを支えるためにお店があってそれで成り立ってきたというのが現状で、商店街の用語では地域密着型商店街という言い方をするが、そういった墨田区に多かった地域密着型商店街というのが今どんどんなくなってきている。工場もなくなって、人もいなくなっているという中で、商店街という枠組みをどこまで今回の策定で活かしてくるのかは結構気になっている。ただ一方で、国の方でも商店街は地域のコミュニティだというふうに文言を入れていただいている。だけど、地域のコミュニティとしては確かに必要だと思っているが、物を買ったりとか、売り買いをするのに、あんまり地域のコミュニティと関係ないというのはあって、多分あれは商店街というのを残さないと、何となく悪いので、地域のコミュニティみたいなところに残しているのかなというふうに思っている。

今後は先程のデータとか見ても、昔みたいな工場があって地域の周りのお店を使いたいというふうになるとは思えないので、そこをどうしていったらいいのかなと考えている。先程老田委員からあった実際に墨田区に住まわせているというお話も非常にいいと思うが、実際は多分そういう方も周りのお店であんまり買わなくて、買い物はコンビニかスーパーで、日用品は Amazon とかをを使うので、商店街で買う人ってもうあんまりいない。ちなみにこの前大学で講義したが、「商店街って知っているか」と聞くと半数が「知らない」と答えが返ってくる。商店街を利用したこともないという中で、商店街をどういう風にやっていくのか、そもそも商店街支援っていらんんじゃないって議論が起きてもしようがないかなと思う。例えば、墨田区で言うと緑は 1 丁目から 4 丁目までであるが、私が事務局長になったときは全部商店街あったけど、今 1 個もない。どんどん減っている中で、本当にその商店街という昔からの産業を支えてきたものを、産業が変わり、人の住み方も変わってきた中で、どういう風にやっていけばいいのかというのは、繰り返しになるが、思っている。

一方で墨田区には良いお店がたくさんあるので、個人的に思っているのは商店街の支援というか、今は商店街連合会であるが、「商店」連合会の方がいいんじゃないかなって、墨田区には今、やる気のあるお店、人も入ってきているし、たくさんいいお店が集まっているので、それがただ商店街っていう一定の地域の枠でなくても、行政区全体で連合って見た方がいろんな支援がしやすい、みんな分かりやすいのではという気はしている。

誰も商店街をあまり気にしていない中でどうしていけばいいのか、個人的に考えているのは商店連合会の方が非常にやりやすいのではという風に思っていて、それ

を今回基本構想に反映させたいという思いで参加している。皆さんと議論しながら、最終的には10年間で商店をやってみたいなという人が増えるような形にしていきたいなと思っている。

(森山委員)

観光という産業は全ての産業を網羅するものだと思っている。今回のその部会の区割りという中で、観光というコンテンツとか観光という括りは実は全てのものに繋がるものだと思っている。

よく言われるのが、浅草にできて、墨田でできないとか、浅草はあんなに人がいるのに墨田に人がいないと言われるが、私としては浅草の真似をするつもりは全く無い。それは歴史のある観光地である浅草や日本橋と言われているところと、競っても仕方がないことだし、墨田には墨田の良いところがあるので、先程加藤先生もおっしゃったように、コンテンツとして、スカイツリーや国技館や向島の花街、北斎、色んなものがあるのに、何となくばらけていて、何となくまとまりがない感じがする。せっかく魅力があるものがあるのに、それらがきちんと伝わっていないという、ジレンマはずっと私自身思っている。

最近そのような話をいろんな人たちとする中で、実はこれらのコンテンツは全て一つのものに繋がっている。それは何かというと、江戸文化。江戸時代から紐解いていくと全てに繋がりが出ることが、最近わかってきて、これらをどのようにストーリー立てていくかということを今考えている。それをホームページなり、どこかの中に発信していくことで、墨田の見せ方ということをしかりやっていきたいなと思っている。

その中には産業もあれば、まちづくり、防災の視点もあつたりと、様々ある。実際観光協会の活動の中には障害者支援というものもあって、色んなところと、繋がっているというところで、それらをうまくストーリー立てていけるような形で、今回の基本構想もそこに持っていけると良いなと考えている。

今、墨田区で色んなイベント、すみだストリートジャズフェスティバル、すみだファクトリーめぐり、ものコト市、墨田向島 EXPO、コミュニティ農園のたもんじ農園とか、色々なことが、起こっている。色々なコンテンツは、大体スカイツリーを基に新たに立ち上がってきたものがほとんど。それはスカイツリーができることで自分たちにも何かできるのではないかという住民、民間の人たちが自分たちで何かをしようというふうに奮起をした表れだと思っている。それらがみんな点でやっていて、それぞれ連携しないでバラバラにやっていた。これらのバラバラなものを何とか横繋がりを作れないかということで、そういう人たちを集めたミーティングを、ちょうどコロナのときにスタートさせた。今までイベントをやっている、例えば商連のキッチンカーが出るわけでもなく、声を掛け合って一緒にやるということも無かったものを、連携して、町会で行っている活動をイベントに持ってくるとか、様々な横繋がりを作ることになったのは、このコロナを機に自分たちで、点を面にしていくという取り組みをスタートしたから。そういう活動は、コンテンツも同じことができるはずで、ストーリーをうまく繋ぎ合わせることができるかなというふうに考えている。

まちづくりという考え方として、私は観光まちづくりということを考えている。

新しさの中に古い良いものを残していくことをやっぱりやっていかなくてはいけないと思っている。確かに、防災の観点からは道が広くなくてはいけないと思う。道を広くすることはすごくいいことだし、是非やるべきだと思っているが、建物そのものを壊したときに、新しいものだけができるということではなく、その町の歴史や文化をどのように残していくかということが、本来行政的な部分でもっと支援をしていってほしいと考えている。

先ほど音の問題があった。工場が元々あるところにマンションを建てて、それは工場の音がうるさいに決まっているが、やはり、それに対しての対策というものもどこかでしっかりするべきではないか。

まちづくりに関しても、例えば、景観条例を作ったり、今は公園に自動販売機を無くそうとかされているところもある。ある程度そういう縛りが、どこかにあってもいいのではと考えている。それが無いがゆえに、せっかく風情のあるところに大きなマンションがいきなり建ってしまうというようなことが多い。

また、今墨田区は新宿区に次いで2番目に民泊の数が多い。ゲストハウスやホテルも台東区、新宿区に次いで多い。街中に確実に観光客が増えている。この人たちとどう共存していくのか。単純に入って排除するということではなく、せっかく来てくれて、墨田区を選んでくれた観光客の人たちにどうお互いに住民も含めて過ごしやすい環境を作っていくかということもやっぱり考えていかなくてはいけない視点かなというふうに思う。

(佐久間委員)

文化の視点で森山委員が観光まちづくりということをおっしゃっていたけれども、観光と文化も相性が合っていて、産業とも相性が合いまして、それぞれ連携することは大切だと思っている。文化は人の心の拠りどころになる部分も大きいと思う。それから葛飾北斎という外国の方からの評価が高い、墨田が生んだ偉大な芸術家、あるいは音楽都市構想、トリフォニーホールという都内でも有数の音楽ホールがあるということが大きなまちの魅力であって、是非この大きな魅力を、区民全体の方々にわかってもらって、子どもたちにも素晴らしいことなんだということを、教育関係の方にも積極的に普及していく。出前授業を行っているが、誇りに思えるまちだと、これは声を大きく言えるものではないかと思っている。これは学校に出張するだけでなく、呼び込んで、ぜひ継承していかなければいけない、これをさらに発展させていくという視点で、墨田区の基本構想に是非入れてもらいたいと思っている。

色々な統計を事務局の方で作っていただいた中でも、墨田区のイメージとは何かと言われたときに、交通の利便性が非常に高いことと、比較的住宅の割安感等もあると思うが、それで転入してくるとというのが一番大きい話だと思う。住宅事情で子どもが大きくなってくると、やっぱり住宅の広さの関係で転出するということだが、大きいと思うが、その中でも墨田区に長く住みたい人も結構いる。住みよいまち、暮らしやすいって感じてもらうのは下町人情だとか、やっぱりいろんな政策のおかげだとは思いますが、文化の視点でも素晴らしい墨田の誇る良いところを、よく知ってもらって、それを未来に伝えていくと、子どもたちもそれに誇りを持って生活をしていけるような視点で基本構想も繋げてほしいなと思っている。

それから社会課題の解決について話があったが、新日本フィルハーモニー交響楽団という、プロのオーケストラが、せっかく墨田のまちにいるというところで、その一流のアーティストの人たちが各小学校中学校全校に、必ず1回は回っている。それはそういう設定を文化振興財団でしているが、それが他の23区、あるいは市部の学校から墨田区の学校に転勤してきた音楽の先生の話の話を聞いていると、墨田区は素晴らしいと、他の区では一切ありませんと言ってもらえる。子どもたちは当たり前に今受けているが、それを今後とも、継続していく必要があると思っている。

成人式、20歳の集いも、今トリフォニーホールでやっている。区内の子どもたちは区立小学校、中学校の時に音楽芸術鑑賞でホールには必ず来ているので、厳かな雰囲気の中で、音楽を聞いて感動するところもあるわけで、その20歳の集いになったときは涙を流しながら歌っている人もいる。そのぐらいいわゆる情操教育というか、心の陶冶において、非常に大きな力を果たしているというのが文化だと思っている。こうした文化の力についてはもう力強く、是非繋げていく必要があるということで、基本構想にばっちり大きく入れてもらいたいと思っている。

(島田委員)

私も墨田区の北の方で生まれて、第一吾嬬小学校の出身。その頃は本当に広場がたくさんあって、子どもは広場で遊ぶとか、路地裏の遊びで缶蹴りや石蹴りしたり、そういう遊びが多くあった中で、私も色々と身体を動かすのが好きだった。

そんな中で1964年の東京オリンピック・パラリンピックの前に「スポーツ振興法」が策定されて、「体育指導員」が任命された。それが私達スポーツ推進委員の前身であるが、体育指導員は運動を指導するというのが目的だったが、平成23年に「スポーツ基本法」として全面改定されて、名称も「スポーツ推進委員」ということで、連絡調整、行政と区民とのコミュニケーションを主な役割として受けた。その中で私達が目的としているのは、地域に根ざして、地域でどういうふうにスポーツを活性化させていくかというのを狙いとしている。

今、南部に外手小学校と北部に第四吾嬬小学校で「ちょっと楽しいスポーツ教室」を開いている。土曜日に開いているが、なかなかスポーツをやりに出て来られない人を、どうやって参加させるかというところが悩みである。どういうふうにするかという、やはり口コミしかない。楽しいから行かない!!とかでも、その行かない!!というコミュニティが広がらない状況。そんな中、待っているだけでなく、自分たちが動いていく必要がある。あと、障害のあるなしに関わらず、障害がある方にも出てきてほしい。それはなぜかというと、障害を持っている方は、高校生までは学校で身体を動かすけれども、卒業したら運動に縁がなくなってしまうという方が多くいる。私達は子どもから高齢者までどういうふうに体を動かしていくか、それから今、平均寿命が延び延びているが、自分で歩いて、自分で用を足して、自分で食事ができてという、健康寿命は、10歳下。健康に過ごしてもらうために、自宅に閉じこもり、身体が動かせないような人たちをどうしようかということを考えている。先程森山委員が言ったように、連携をとる必要があるので、私はスポーツ振興課で仕事しているが、例えば障害のある方とスポーツだったら、障害福祉課の方や、リハビリテーション病院の理学療法士の方とかそういう人たちとタッグを組んで、障害者のスポーツ推進委員会というのを立ち上げている。

この間の東京オリンピック・パラリンピックでは、墨田区がボクシング協会のボクシング会場になったので、レガシーとして、年に1回ボクシング祭りをやっている。私達は年齢問わずできるポッチャを普及しようとしていて、そこにブースを出したり、老人会や児童館に足を運んでやっている。

日本プロ野球 OB 会が錦糸町にあったり、ストリートサッカーが流行っていて、その本拠地もあって、結構墨田区に集まってきている。そういう人たちとタッグを組んで、イベントとか大きくじゃなくて小さくていいのでやっていきたいと思っている。それこそ歴史を回ってクイズラリーみたいな形でウォーキングを楽しむということもやっているの、色々事業を進めていきたいと考えている。

今、ひがしんアリーナがすごく人気な中、区民が利用したいときに予約がなかなか取れない。学校開放もそれぞれ埋まっているということで、子どもたちの意見からも、公園の中でボールを使ってはいけないとか制限があって、なかなか身体を動かさせないのではないかなと思っている。幅広い年齢層に楽しいスポーツを提供していきたい。

この基本構想の中でも健康づくりのためのスポーツの一環として、入れていただけるとまた、その中でコミュニティができる、その中で歴史も感じられるなど、ここにいる皆さんで連携をするとすごいものができるのではないかなというのを、皆さんのお話を聞いていて思った。

(相澤委員)

まずこの部会を選ぶときに希望を出したが、私は趣味で城巡りをするぐらい歴史とかが好きで、今 Web エンジニアとして、ベンチャー企業に勤めていて、産業とかにも興味があったので、この部会に希望した。

皆さんのお話を聞いて、墨田区に住み始めたときのこと思い出していた。私が墨田区に住み始めたのは、もちろん交通の便が良いというものもあるが、元々墨田区に住む前から、葛飾北斎が絵にしていた三囲神社にお正月に初詣にしていた。たまたまその縁があって三囲稲荷からすぐの場所に引っ越すことができとても縁を感じている。

好きな人は調べていくとは思いますが、そういう歴史的なことを自分で調べないとわからない人などに対して、発信していく力が墨田区はちょっと弱いかなというふうには思っている。例えば今年アニメの舞台になったリコリスリコイル、2 周年ライブ配信がちょうどすみだ水族館であった。皆さんご存知かもしれないが、アニメで町おこしをするところも結構増えてきていて、もちろん墨田区はアニメでまちおこしをしなくても色んなランドマークとかがあって魅力はあると思うが、そういうものが繋がっていないっていう、皆さん仰っていたように点と点になったままで繋がれていないので、そういうのを繋げていって、もっと魅力を発信して、人を呼ぶことができるのではないかなというふうに感じている。

産業の面で言うと、ものづくりのまちとしてあって、工場が少なくなってきたというのはあるとは思いますが、新しい産業を迎えていかないと財政の面でも区の収入が増えていかないし、スカイツリーだったりオリナスだったり大きな商店ばかりに依頼していても、結局お金は入ってこないままになってしまうと思うので、新しい産業を育てていく必要があると思っている。

ただその新しい産業を育てていくにしても、インキュベーションセンターみたいなのが錦糸町に新しくできたが、それができたことすら知らない人が多かったり、そこで何ができて、どんな企業が入っているか知らない人が多かったりするので、その辺、産業のところも含めて区だったり、産業産官の方で連携して、発信が足りないのかなというふうに考えている。

（加藤委員）

実はこの第1部会、全体4回の中で次、産業振興、それからスポーツ・文化、観光・シティプロモーションと徐々にテーマを絞って審議するが、大事なものは横串だったり、皆さん同士の考え方というふうに、今日は自由にテーマにあまりこだわらずに、お話いただくのが良いかなと思ったのが趣旨。

1周したが、もう一度お互いの中で何かご質問とか、ちょっとまだ言い足りないこととか、本当に今日は自由にご発言いただければなというふうに思っているが、いかがか。

（井上委員）

改めての確認だが、墨田区の会社がすごい儲かった場合、納めた税金は全て東京都に行ってしまうと、墨田区にはそんなに関係ないか。

（佐久間委員）

もちろん関係ないわけではないが、都区財政調整制度というのがあって、法人住民税については、一旦都税として徴収されて、都区間、特別区間で調整されて各区に配分される。千代田や港に本社がいっぱいあるから独り勝ちするということにはならない。

（阿部委員）

冒頭で産業集積のお話を少しさせていただいた。商店街とはまさに商店集積。八百屋さんがいて、魚屋さんがいて、居酒屋さんがあって、その1軒1軒の専門店が、その街の中にいることで、その商店街が出来上がっている。職住一体が理想かどうか、ワークライフバランスというけど、まるでワークとライフは敵対に感じる。本来はワークはライフそのものであるべきだと思う。

これうまくバランス取らないとおかしくなるのでは。1階がお店や工場で2階に住んでいるというこの職住一体は、基本的には24時間仕事している状態に耐えられる人でないと持たない。シャッター閉まって今日はお休みといっても、電話一つで、どうしても欲しいから開けてよと言われると、よほどでない限り居留守は使えない。夜中だろうが早朝だろうが土曜日だろうが日曜日だろうが関係ない。

なので、今の生活の価値観と職住一体が馴染むのかというのは、自分で言っているやや疑問に感じる。

（森山委員）

確かにその観点もあると思うが、1つには、そこに事業継承というのがあると思っている。昔は、親の仕事を背中で見ながら、将来はこの家の仕事を継ぐと思って、親の仕事をみて誇りに思ったり、事業継承されてきたことが、子どもが大きくなれば家が手狭になって、なかなか職住一体は成り立たないから、結婚するとともに外に出ていく。2代目、3代目が外に出ていったときに、離れて生活をしている

と、親の働いている姿を見ない、通常のサラリーマンと同じような状況になってくると仕事を継ごうとか、誇りのある仕事だと思わなくなっていくので、家、仕事を継がない、自分は違う仕事をしていくということで、事業継承に繋がらないということもあるから、事業継承者が少なくなっていく一つの要因としてあると思う。

（加藤委員）

職住近接の話、相澤委員のスタートアップ企業の話でないが、オンライン的な仕事があって、まさに職住近接だと思う。

（相澤委員）

私は会社に行ってなくて、家で仕事をしているのでとても便利に感じている。

会社は渋谷にあるが、渋谷まで行くとなると1時間近くかかる。ただ、遊びに行くとか買い物に行くとかは、どこにでもすぐ行けるというのは便利に感じるので、気分転換をしたいときに、外のワーキングスペースに行く時があるが、都が行っているワーキングスペースがあるが、知っている人でないと使わないみたいな状態になっている。あそこも元々工場のような場所をリノベーションして作ったところ。あとは今曳舟駅の近くにできているが、やはり知らないと使わない。

なので、家で仕事をしている人はそのまま家でするかもしれないが、家賃が高いので郊外に引っ越すという人も出てくると思う。

（阿部委員）

結構重要だと思うのは、警察行政とか消防行政とか税務行政とか、その地域で仕事をしている人たちに圧倒的に支えられている。大きな企業だけでもって、そこで働いている人たちが外から来るという感じのコミュニティになると、ほぼ支えきれなくなるし、教育現場PTAの活動も多くが地場の産業の皆さんに支えられているところもあるので、結果的にそれが産業住民になっていて、防犯にしても防災にしても教育にしても、地場でもって全てを支えているところがすごくやっぱ重要だと思う。仕事だけで完結しているわけではない。

商店街がなくなると街路灯が全部消え、真っ暗になったみたいなことが起きるので、単に商店が並んでいるというよりも、そのエリアの基礎インフラの一つになっている。

（井上委員）

本来は商いが最初に来なければいけないのに、商いが最初でなくて、そのインフラとか、防犯とかの役割とか、そういうところが先にきている状況。

（阿部委員）

本業がちゃんとできてないのに人の世話までできないから、本業はちゃんとしながら、どれだけ共助に貢献できるかというのが大きいテーマ。

（老田委員）

商店街にしても、工場にしても、実は割り込んできたのは住民。割り込んできて、要は、元々はこういう事業をしているところがあるって、この近所の人達からすると便利だという話で、どんどんそこに集まってきて、できている話。それが今度は環境が変わってくると、例えば自分が小さい子どもの頃は1件の工場が退くと1件のマンションができて、今そうではない、もうかつての地上げみたいな話になって、数件のところを退けて、そこに大きいマンションが建ってしまう形になっていて、そうするとそれまで連続したものがどんどん点になってしまう。それはそういう傾

向に動いてきてしまっているのです、要は本来的に物理的な近接がもたらす効果というのがどんどん損なわれている。

(森山委員)

でも街の移り変わりはすごく面白くて、墨田区に産業集積ができた理由の一つは、江戸時代の神社仏閣だとか、武家屋敷とかの大きな敷地があったところが、明治維新で無くなったが故に、そこに工場や住宅ができた。それがまた今度は大きいマンションに変わっていく。不思議なことの繰り返しと思う。

(相澤委員)

本日の資料にあった夜間人口と昼間人口が 27 年からあまり変わってないという、スカイツリーができてからも変わってないというのが不思議でならないが、それはどういう事情なのか。

(事務局)

夜間人口は定住の方の人口になってくるので、やはり今、墨田区の人口が増えているが、昼間人口が増えていないところとスカイツリーの関連性までは深堀ができていない。

(森山委員)

居なくなってきているのではなくて、変わらない。あまり変動がないってことか。

(加藤委員)

スカイツリーとの関係もわからないので、また宿題か何かでできれば。

(老田委員)

やはりワンルームマンションが増えているというのが強烈に強いということと、実は自分の子どもがここでもファミリー向けのマンションを借りたいと、どうにかしたいって言って探し回ったが、夫婦 2 人の給料だと借りられない。賃料が高すぎて、若い子たちの給料ではそこまで賄えない。それだったら、交通費を払って、もしくはもう別に会社に出なくて済むので家賃の安い千葉の方へ行こうとか話が変わってしまう。

自分 1 人でどうにか始末のできる間は、便利な所に住んでいて、夫婦になって現実見始めたら違うところへ行かなくてはいけないという感じになっている印象を受ける。

(井上委員)

それは私もよく聞かすが、これって本当にデータなど裏を取れるのか。

(加藤委員)

実際誰がどういうふうにいるかってよくわからない。具体的な本当の裏付けを取るためには、出てくる人にインタビューをしないとわからないし、なかなか難しいところ。

(森山委員)

マンションが 100 室あるとして、そこに 100 世帯がちゃんと住んでいるのかっていうのを調べられるものか。

(加藤委員)

基本的には空き家率。

(森山委員)

投資用として買っているとかもよくある。

(加藤委員)

そういうのは空き家になる。

(老田委員)

結局そこをまた貸ししたりとか、民泊に変えてしまったりとか。

(島田委員)

白髭団地とか立花団地もそうだが、大きな団地があったときには、学校がすごい増えた。今、小学校は 25 校しかない。

ただ、私小学校の教員をしているが、曳舟の学校は子どもが多くなった。もう教室がパンパンで、マンションがやはりたくさんある。要するに高層マンションで、どういう状況かといったら、やはり高収入・高学歴の人たちが多くなっているのです。うちの学校は学力が上がっている状況。その子たちはやはり学校だけでなく、塾にも行くから、お金はある。曳舟に長くいるが、12 年前はクラスで私立に行く子は本当に 4、5 人だったが、今は 6 年の担任をしているが、クラスに 36 人いて 23 人が私立受験をしていて、変わってきている。

(加藤委員)

マンションが建って、子どもができて、小学校を作って、その子たちが卒業した後どうするのかっていうこと、学校ってなかなか予測をするのが難しいところ。

(島田委員)

核家族が多くて、うちのクラスでおじいちゃんおばあちゃんと一緒に住んでいる子はたったの 2 人、あと全部核家族。おじいちゃんおばあちゃんは傍にいますが、一緒には住んでない。

(森山委員)

結構親と近い距離で住んでいる人たちが墨田区には多くないか？おじいちゃんおばあちゃんも墨田区に住んでいて、息子さん夫婦とか娘さん夫婦が近くに住んでいるというパターン。でも一緒に住んでいない。

(阿部委員)

娘さん夫婦が圧倒的に多い。女性の帰巢率は高い。なぜか戻ってくる。

(老田委員)

一つは働けるから。自分の親に世話してもらえれば働ける。だから世帯収入が上がって、家賃が高くても住めるようになる。

(島田委員)

スポーツ関係で言うと、地域のスポーツサッカークラブとか野球チームとかにも入っている子もいるけども、本当に上を目指してクラブチームに行っている子が多い。近くにルネサンスがあるので、スイミングやったり、毎日習い事でいっぱいという。私達は何をどうしたらいいのかという感じもある。

本当にとっても良いのは、5・6 年でオーケストラ鑑賞教室で、トリフォニーホールに連れていってもらったり、先程話のあった学校に新日本フィルの方が来てくれるというのは子どもたちの拠り所だし、連合音楽会というのがあって、学年によってはトリフォニーホールで歌えるというのはものすごく良いこと。

でもやはり、子どもの中でも北斎美術館を知らない子がいる。この間、社会見学で北斎美術館に行ったが、5 年生に北斎って誰と聞かれた。

(佐久間委員)

	副教材とか、そういうことをやっているみたいだが、やはり授業の時間数があって、総合的学習、そういうものもやっぱり少ない。 （島田委員） とにかく昔の遊びじゃないが、いろんな遊びを通して、近くにキラキラ橋商店街があるので、そことコラボして、ボッチャをやったり、綱引きをやったりとかできないかなと考えている。 （井上委員） タワービュー通りでボッチャやっていた。綱引きもやっていた。 （森山委員） 最近隅田公園のイベントで夏場に出てきてもらう人たちというのは墨田区薬剤師協会の熱中症プロジェクトの方たち。毎回夏のイベントに出てきてもらって熱中症対策をやってもらっている。 だから、必ずしもイベントを行うような団体ではないところの団体も入ってきていただいて、それぞれの役割をイベントの中で行ってもらっているの、今、括りは全然ない。この団体は駄目とか良いとかというの、全くない。 なので、例えば観光協会が障害者支援しているのは実はアート系。スポーツではなくアート系でやっているが、ただそれはスポーツでもできることだと思うので、いろんなこういう場はないかということと、どこに言えばいいかわからないってことは多分多いと思う。 （加藤委員） 議論が尽きないところではあるが、時間が迫ってきているので、資料 9 をご覧いただければと思うが、今後、第 1 部会の方では産業振興、文化・スポーツ、観光・シティプロモーションがテーマになっていて、次回はこれの一つずつ話していこうというふうに考えているが、この点はよろしいか。何かもう少しこれを膨らませるとか、他のものを取り入れた方がいいとか、このままの形でもよろしいか。 ここだけではなく、やはり横串の連携というのも大事になってくるので、産業振興も産業の話ばかりは、なかなかできないと思う。できる限りこれをテーマにして、また次回以降もぜひ皆様方にいろいろお話を聞かせていただくのが一番いいのではないかなと思う。 今日実は私もいろいろとお話伺っていて、阿部委員の職住一体の話、老田委員からも、一番すごい気になったのは、自分の住んでいるところに興味がない人が増えてきたという話。大きな問題だと思った。点と点の問題で面がないとか、いろんなお話を伺ったので、そういったことも踏まえながらまたちょっと検討させてもらえればと。まとめてしまって申し訳ないが、何か最後にこれだけは言っておきたいということはあるか。 （各委員） 特に意見無し 解散
所 管 課	企画経営室政策担当（内線 3 7 2 2）